世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Research of Material : transcript of lecture in Kokugakuin University by Orikuchi Shinobu, The birth of Japanese literary history Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-09-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 高雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1901

資料　折口信夫・國學院大學講義

発生日本文学史二　昭和七年度①

伊藤　高雄編

〔凡例〕

・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫（釈迢空）が昭和七年度に國學院大學にて行った講義を、門弟で助手の小池元男氏が筆記・整理したノートである。

・資料の解題は、國學院大學栃木短期大学國文學會の『野州國文學』第八十六号（平成二十五年三月）及び『國學院雑誌』第一一四巻第十号（平成二十五年十月）に報告しているので、そちらを参照していただきたい。

・本号に翻刻する資料は、ノート番号51である。ノート番号51は表紙に「折口信夫先生　發生日本文學史二　昭和七年度」とあり、「六月十六日」「六月二十三日」「六月末日」「十月六日」「十月二十七日」と日付を記したのちブルーブラックの万年筆にて記される。時に空欄もあって、下書きの清書と見られるが詳細は不明である。また、ノートの反対側からは『万葉集』の巻一の七一番から七七番までの歌の注釈が記される。

・表記は、原則として漢字は常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によっては正字を用いたところもある。また、翻刻の整理に際しては、読解の便を考えて、省略字体や文中・文末表現を若干整えた場合がある。翻字不明の箇所は、□とした。

・本翻刻に際しては、伊藤が翻刻を行い、武蔵野大学講師渡部修氏、本國學院大學大学院生郷田典子氏その他で読み合せをし、最終的に伊藤が整理した。

六月十六日。

先日から山・海

山海の文学が合流したに違ひないといふだけの事。例へば、ほかひ。今も地方により、ほけ、わつぱなど云ふものは、ほかひの桶で、行器（ホカヒ）→ホケ。桜の曲げ物をわつぱ（ワツパ）と云ふのだ。あいぬはしんとくと云つてゐる。何故云ふのか。金田一先生にも不明だつた。日本の文学に鎌倉に出て、室町に成熟した、俊徳丸といふのがある。謡曲、弱法師にも出てゐる。これはしんとくかも知れぬ。あいぬのみでなく、北陸地方では漁師の弁当をしんとくと云つてゐる。あいぬのしんとくといふのと北陸のしんとくは一つであつて、北から北海道へ運ばれ、あいぬの宝物となつたものだ。俊徳丸は、しんとくらしい。江戸時代の古浄瑠璃にはしんともある。身毒といはれた。天竺と作者は考へてゐるらしい。ともかく俊徳といふ。癩病で、盲目の乞食になつてゐる。何か昔の旅行者の持つた道具が、物語の人物名となつたのではないか。今でも、ほかひを用ゐる厳重な例は、山の神祭りに山の神への捧げ物として持つてゆく。変化して冠婚葬祭には、ほけに入れてゆく。正式には山の神祭りにのみ、信州辺でも。地方農村の大切な道具であると共に、山の信仰をうしろにひかへてゐる様に思はれる。この、ほかひがいろんな用途形式上に変化をして来る。もとは神を携へ持ち歩いた旅行具が神への献上物・入れ物になり更り、神祭りの神社から受けるものを受けて来る容器で、宮筥（土産）とそれを云ふのだ。

神の分霊、又神のお下がり物を貰つて来る。それで、かういふ風になつて来ると、今度は、みやげと云ふ語であらうが、いつのま、ちぎ、ちげ（東京）、ちぎり等と云はれてゐる櫃がある。節供の時に女が贈答する時に用ゐてゐるものである。つまりどういふ訣か、ちぎ櫃は、蓋と底と一つでない。めんつうは合つた蓋でなく、板を四角にして、曲げ物の上にきせ、藤の花の紋様をつけてゐる。芝の大神宮の宮筥にちぎびつに入れて来る。大神宮では大久保彦左の首桶だと云ふてゐる。今では太々餅に用ゐてゐるが、ちぎは浅くなつてゐる。形は変化してゐても、そこを通して神霊をもち運んだ根本思想が、どこかに残つてゐる。社からの土産を入れて来る。これが二月の初午になると――普通は稲荷祭りになつてゐるが、これは都で稲荷山へ行つた為で、地方では観音山に参る。神戸の摩耶詣には牛馬をつれて詣出てゐる。今は忘れてゐる。――稲荷祭りの供へ物に、このいびつのほかひを用ゐる処が多い。つまり午の日に、牛馬を神の子分として、連れてゆく訣である。何故さういふ風がはじまつて来たか。そこになると分らぬ。稲荷祭りが行はれて来る原因は簡単で、里の人が山の神に参る日である。それを同時に自分と共に住んでゐる獣物を連れてゆくのだ。

かういふ風に見て来ると、ほかひは山の生活に根本的に結び

ついてゐるものあるらしい。丁度、くゞつが海部のものであつたのが、人形遣ひ、その変化した遊女とその亭主の名となつたのと、同様。山の信仰とほかひは関係深い。

処が、この祖先の生活が海辺から山の生活にうつると異人が山から来ると考へる。そして夜の暗まぎれ、明け方の暗い時に異装して家々を訪問する。それが神楽といふ芸能をば分化して作る一つの路であり、同時に神楽と似たものがいくつもある。そのうち芸能と関係ない、神遊び、田遊び、田楽、呪師、猿楽などは皆訪問して来る。山の木をば引いて、それを中心にして沢山の群集が。かく芸能と発達せず、唯の儀式となつたものも沢山ある。われ〳〵が日本芸能のはじめをそこにあるのは現在も、又は絶えた事も。不思議なほどすぴりつとが多く、それが芸能が多いところより進めて行つてそこに達した。

そのうち、一番目につくのは、神楽と似た形式を具へながら歌も舞もそなへてゐない天子が御飯をあがる祭りをする事がある。まづ宮廷一の大きなのは、大嘗祭・新嘗祭・神今食（ジンコジキ）などがそれである。神今食は、神聖な新しい食物を召し上がる式だといふ事になるが、古米を上つてゐる。かゝる式を年中に繰り返すと、新米が食べられぬので、語義不明となる。天子が神と共に食する場合は、異様な人が宮廷に練り込む。これが大殿祭で、おほんべ祭りの前提である。群行の形で人々が練り込んで、天子常用の御殿を廻つて、西門より抜けて行き分れる。神楽の時には北門から群行して来る。処がこれは東の延政門からやつて来て、西へ抜けてゆくのだ。御殿に上ると中臣、斎部の神主が先導し、一殿毎に柱に鏡を掛けて祓へをして次へ進む。かくして天子常用の御殿で行ふ。

何処するかと云ふと、これは宮廷の延政門で声をかけて、内部より門を開けるのは spilit が中門口より入るのと等しい。何故、こんなものを掛けて歩くかと云ふと、自分がしてゐながら、そこへ鏡や玉を掛けるのは神がする事になる。唱へ言をするので玉や鏡が現はれた筈のが逆になつてゐる。これが即ち祝（ホク）である。ほぐとも云ふ。このほぐにことを附して、ことほく。このことは、殊・言不明。播磨風土記を見るとその時に三韓征服、住吉の神を入れられた時に、赤丹が出たので、舟につけた為に無事に朝鮮につき、平らげたと云ふ。これはほくの古い資格を見せてゐる。つまり赤土がその神の方から云へば赤土をあらはし、人間の方より云へば唱へ言で赤土をほぎだすのだ。祝詞では誇張して、「赤にのほにきこしめせ」等と云ふてゐる。健康になるやうに赤頬の様におなりなさいと云ふのは合理化である。古い祝詞で、「赤にのほ」に合理会をしてゐる。何か詞が変である。つまり赤にを特別に神の意の表示に用ゐる事が多かつたので、「赤にのほ」と云つた。天子の健康を祈るのに赤土が必要。赤土を出して来ると天子の寿は祝福される事になる。それが連想で変化する。ねばつちを物忌みのしるしに皃へつける。「青丹、白」になどと云ふのもそれ。これは、入れ墨なども物忌みのしるしなる事を示す。歌など見ても禁慾生活中のしるしである。女の場合に

は、さにづらふ等いふ語で示してゐる。づらふは頬か、ぬるの変化か。赤土を皃に塗ると、祭りに携はつてゐる人と云ふ事になる。天子の身を祝すと物が出て来る。その人々はそれを塗つてゐられる。その為に「赤にのほ」が皃が赤くする意味をもつて来る。第一義は赤土か何かの意味で表はれて来る。「ほにいづ」と云ふてゐる。うらは梢。木の先がうら。うら、一番先へあらはれて来るといふ事。ほにいづも先へ出る事。皃に出るのだ。皃が人間の表情の一番先に出るところ。ほにいづは、もと神事の用語。それが恋歌の上の類型的なものになる。ほが表はれると云ふ事は、わかりやすくいへば占ひのけに表はれる事をうらにいづと云ふ。そこへ表はれて来るのが、うら又はほである。（ぬけた）。

神が自分でことばを云ふのは、最初からの事実ではない。神の唱へた語は文学のはじめだといつてはいけない。それ以前に神はしるしを見せる。それが、うら・ほである。先の方であり、同時にうらなひに関係ある事。さて、ほは、赤にのをもつて皃へ塗つたそのやうに健康にしてくれと云ふ事。古くうらを神に願ふ事をうらふと云ふ。少し下つた時代には、うらなふと云ふ。神に対してうらを出す事を乞ふ事である。それと同じく神にことばを唱へてゐると神がほをあらはす。丁度うらふの語があるのと同じくほくが出て来る。再活してほかふ→ほかひが出る。このほくに名詞がつくと、ことほぎ等が出来る。清濁は昔は自由であつたから、定めずともよい。ほかふと、ほくはもと一つ事だつたのが分岐して内容が違つて来る。神にほを乞ふ事がほく。神にうらを願ふのがうらふ。更にうらなふとなる。ほには秀の字を当てる。一番先と云ふ事である。うら、梢、末と宛てゝゐる。うらを祈り出す事がうらふ。ほを祈り出すのがほく。祈り出す事を忘れて、いゝ結果を持ち来たす。神、納受の証拠を持ち来たす語を唱へる事がほくになる。祝福せらるべき結果を祈り出す事をほくと云ふ。うらふ・ほくは同じこと。播磨風土記の赤丹は、神が赤にのほを見せたのだ。これによつて、神功皇后に関するものがすべて健康で力が増した事になる。後世、客船に丹を塗つたのもこの故といふのは合理論。

ほかひだけを考へて行つても、前後に文学がある。行器の生れる前にも後にも、扱ふ人の間にも、文学がある。ほぐと云ふ事は、後には祝福するといふだけの意味しかもたなくなる。大殿祭の時に、神主がかゝみ・たまをかけるのは唱へ言の先に、神のほを示す事。それは自分等が神主でもあり、神でもある為に、先にほを出したのだ。このほの種類が、村、氏、家で違ふのだ。家の場合に定つたほによつて事の正否を示す。大殿祭は天子があづからぬ。大祓にも天子があづからず。大祓は宮廷の群臣の祭り。その如く大殿祭に天子は御湯殿に入つてゐる。その間に山人が宮廷を祈つて廻るのだ。臣と天子とのする事が別。何にしても柱にものを掛けるのは語によつて祝福せられたしるしを先に示すのだ。それを見て語が納受せられた事になる。ほぐ、ほかふが同内容かどうか疑問。ほく・ほかふとことほぐは同系ながら、意味が違ふ。ことほぐには

動作が入つてゐる。後の語で云へば舞踊、演劇まで入つてゐる。踊り鎮める方法と昔の事を復習する演劇とをことほぎと云ふ。この時には神と精霊とが出て来る。その間に争ひ、服従が行はれる。それで、ことほぐには動作がある。平安朝になつても、喜劇的な事をしてゐる。精霊が神に負ける形をする為である。神に負けるといふのだが、負ける処を主とする事が大事だが、次第にまつりは神・人ともに好きになり、享楽する為に結着をつけるまでの過程を行ふ事が多い。

再び神楽へ戻つて、はじめ人長――山人の長――と才の男とが別々に物をしてゐる。終りに、二者立合ふ――対立して云ひ争ひ、動作の上の争ひをする事――立合ひは故に二人ゐても同じ事をせず、相舞ひになると二人で調和するやうに別の動作をする。群集で舞ふ時には、同じ手を舞ふ。立合ひは同目的で、二人で違つた舞ひをする事。その立合ひになつて来る事がある。古い神楽で、「いづれぞも」と云ふ事。雅信流の神楽では、早歌と云ふ――即興的に間をおかずにかけ合ふ事――長い文句を早歌と云ふ事になる。次第に用語例が違つて来る。早歌は人長と才の男との掛け合ひである。一問一答してゆくのである。大体、即興的にやつたものである。かく神と精霊を形とつたものが互に争ひ合ふと云ふ事が一番神事の芸能のうち、面白い部分である。かうした事が同時にことほぎになる。ことほぎは、をこな姿をしたものが出て来る筈のものである。私は三番叟は全く山人を形どつたものだと思ふ。これは翁舞のくだけたものである。その正当なものは白式尉で、三番叟は黒式尉である。もと白黒対立してゐたかどうか。三番叟は猿楽の本原であつた。そして黒色のものが純化して白いのが出た。その中間が千才である。後には猿楽では武家にもてはやされて、千才を子方の役にして了つた。雅楽のまねをした為である。かうなると、武家が喜ぶのだ。子方を用ゐた為に能楽は武家に取り入つた。世阿弥の容色から観世は、栄へた。

もとは黒式尉は神楽の才の男に当るもので、それが三番叟となり、純化して白式尉を考へて来た。三番叟は、非常に滑稽なをこなものである。つまり、ほく、ほぐは単にしるしを現はす、又その文句を唱へる事。後にはたゞ祝福する事。

ことほぎは、神・精霊の対照が行はれ、舞踊、演劇の古い形が付随してゐる。

海の芸能は日本の古文献に沢山見えるが、山の芸能と云ふものは、証明出来るものが少ない。にもかゝはらず印象はかへつて強く残り、古芸能の局部、又は他の物に移植せられて残つてゐる。三番叟は室町よりは遡れぬが、山のものだといふ事だけは解る。ことほぎのもの故に卑猥な文章である。笛の句を用ゐ、催馬楽を以てして了ふが、今でも山間の翁三番叟には極端なものがある。これが能楽の翁を見ても神歌はもとより三番叟の歌にも動作にも純化せられてゐるが、蔭に見える、翁――三番叟を通して見る――は日本のものである。雅楽に翁舞ひと云ふものがあるけれど、河口さんのいふやうなものではない。

六月二十三日

山・海の文学のうち、例へば山姥等は謡曲等を見ても山姥舞をば舞ひ伝へてゐる遊女があり、又その遊女と本当の山姥と出逢ふ所を書いた山姥の曲もある。山姥並びに山でない処の姥の話を申したい。

文学の発達の一方面を受け持つ舞踊、演劇、音楽――芸能に関係が深いから。年寄つた女をうばと古くより考へてゐる。をばと違つた意味の様に考へてゐるけれども、真実はさういふはつきりした区別がない。実のところ、うば、をば同じ事らしい。それは間に、乳母（ウバ）を入れて見ればわかる。事実、うば、をばは同じ事。それで前述した山姥は日本の昔の芸能に関係があると云ふ一方、同じやうなものが、海の信仰の上にもあつた。言はゞ海姥といふべきもの。うばは子供を育てる人で、小母（ヲバ）も子を育てる人といふ事。大母（オホバ）と婆さんの事を云つてゐる。このをばは子供を育てる役の（オバ）ものである。民俗学的な話になるが、八重山に行くと宮古地方へ行くとをばに当るものあり。子供が生れると近所の娘が子供を子守りをする。無報酬のもの。子守の職業化したのは近代の事であつた。元は縁者から出たものである。子供が大きくなり、女の子が嫁入りすると、姉分の女が別れる。この女をぶなじといふ。神の下仕へとして、神の用をしてゐるもの、意味である。ふなじ別とて嫁家の人口で櫛をもつて娘にさしてやると娘はあとを見ずに嫁家に入る。日本でも伊勢の斎宮の一行が旅行する時の暇乞ひの時に別れの御櫛をさしてやると斎宮は後を振りかへらずに伊勢へ行く。日本では櫛は親子の別れだと云ふてゐるが、実は、神のものになつた印である。ともかくも、尊い人を育てる役の者があつた。日本では国々を合せて複雑化した為にわからなくなつてゐるのだ。処がこの、子供を育てる者が存外、近代文学、子守り歌を生んでゐるのである。村の組織の呪、家主の悪口、子供を脅したり、美人をねたんだりする習慣は、子守りといふ雇用関係は新しいのだが、子守りの習慣は古い。

子守りの文学の話をして行きたい。

日本では、お母さんの語が本当にあつたかどうか不明。母の事をおやと云ふが、これはおゆより出てゐるのだ。天照大神はみおやの神と書かれてゐるが、お婆さんである。昔の文学の対象は何か。階級は何かと云ふと、帝王、国王、酋長等を対象としたものだ。あいぬのゆうから（詞曲）、おいな（神曲）とを見ると、発達したものは、若い女が子供を育てる。子供が力強い神になる。最初、神を祭つてある処に、若い英雄がゐて育つので、本当の姉が育てるのでなく、神を育てる女があつて、それが次第にあいぬの物語を生んで来るのだ。これはあいぬの民俗だけでは説明はつかぬ。日本の風習も入れた方が簡単に説けさうに思ふ。

あいぬのゆからは一人称である。日本にもあつた筈だ。英雄の一人称の文学。で育ての姉を考へてゐる。つまり日本の後世の風俗で云ふと子守り。古くいへば、をばである。母の妹が、その子を育てるので。事情によつては、その家と近い家

の娘が生れた子供を専任で育てる。乳を飲ませる事は子守りの重大要素ではない。

故にうばは経産婦でなくてよいのだ。後うばをめのとといふ。広まつて男をもめのとと云つてゐる。尊い人の後見人である。女のめのとは今までは妻のおと。妻の年の若い姉妹だと云ふてゐる。めのとの起原は、鵜葺草葺不合命を育てる為に、玉依姫がわたつみの国から子守りに来た。そして育てた後に尊と夫婦になつた。それがめのとだと云ふてゐる。これは昔の一つの話である。昔の結婚法は、妻は一群の女がやつて来るのだから、幾人も後から子供の世話をするものが出来て来るわけだ。めのとの語の説明は誤りとしても、少なくとも妻の妹が尊い子供を育てた事は本当。それと共にその関係がなくとも特殊な関係ある。宮廷と豪族の間では、宮廷生まれの人が豪族の家の養子分になつて育てられる。その場合にうばと、おばが分れてゆく。おばは肉親、うばは他人と云ふ事になる。乳を含ませなくてもうばであり得る。その習慣からして、尊い皇子をどこかの家で育てる責任を持つ様になる。その家が尊い神の子を授かつた形で育てゝ行く。その家をば、壬生部と云ふ。その育てる事に関する雑役を司る団体である。宮廷の親類である事もあり、豪族に育てしめられる場合もある。これは昔の豪族の宮廷に対する為事であつた。主として壬生になる家の主人は臣であらはす。大忌と云ふ事である。多く小忌（ヲミ）の方のみを神事に伴なつて覚えてゐるが、それではない。小忌の上の大忌は臣と同じ。尊い神さんを育てる家の主が大忌人であり、為事から云ふと……親王の為の臣であり、壬生である。この壬生が日本の叙事詩を発達させてゐる。天子が大嘗祭等で湯を召す時にそばについてゐる人を、大忌、又は大忌人と云ふ。物忌みする中の一番重な人である。大殿祭に関する文献には大忌人が出て来る。当時、有力な大臣の為事で、御湯殿の側に侍候してゐるのが原則で、昔の形に還してよくわかるのは、鵜葺草葺不合と人皇の代では反正天皇の所にはつきりしてゐる。ことに反正天皇は天子が生れる事に関しての昔の儀礼に関する重要な記事をとゞめてゐる。反正天皇は淡路の国で生れたと云ふ。瑞井で産湯を使はれた。その時に丹比連が瑞井の添に立つて天つ神の寿詞を読み上げた、と云ふ事になつてゐる。その時に瑞井の側に多遅の花があつて水の中にこぼれた。その湯を用ゐたのでたぢひの瑞歯別命と云つた。つまり、これで、この天子に関して丹比の話が二つ重つてゐる。たぢひはいたどりである。

成人せられて見ると歯が蝮（タジヒ）の歯のやうに歯骨が、たつた一骨と感じる。そつぱであるのだ。義経もそつぱの猿まなこである。一枚歯が多に出てゐる事になる。すると話が三つ関連してゐる。そしてこの方が育つて、天子となつたので丹比の家と関係が深い。後世まで天子が争ふのは□□□□□

ところが、丹比の話は反正帝に限らず、もう二ヶ所ある。これは根本では一つの儀礼より出てゐる。例へば、天子と有力な女性と結婚する時には定つた唱へ言があつた。

大国主以来、歌はれてゐるそれが年々皇族の伝説の作品に用

ゐられてゐる。例へば、大春日の皇女について説明すると云ふと、大春日のなれそめの歌は、大汝命が沼河媛に求婚した歌と似てゐる。泊瀬小国の歌二首ある。貴族の結婚には大汝、……が愛人に呼びかけ、結びに歌があつた。これを唱へると大汝命の時代と同じくなる。三つ殆んど同組織で出てゐる。妻覓ぎにも子供が生れた時にも唱へた。

允恭帝の時の記録がある。が、それ以前にあつた事かもしれぬ。天皇の（三行欠）

中臣が大嘗祭の時に唱へる。中臣寿詞を唱へる。天上の水と地上の水と合せて、天子のあがる酒、米を作つた来歴の唱へ言。けれども、これは家々によつて天つ神寿詞は違ふ。中臣寿詞は（半行欠）

大嘗祭は米を祖先と天子が供にするばかりでなく、本義の伝つてゐる間に歴代の合理化が行はれる。中臣がさうするのは、天子が神と物をあがる時代になると、天上の水と地上の水とをまぜて□□物をおきになつたのだ。

大嘗祭は召し上がる外に天子が生れる事もしてゐる。平安朝の宮廷の大嘗祭は天子復活の式をするのだ。天つ神の寿詞は尊い人が生れるのに対したものが入つてゐた。

天つ神の寿詞は国つ神の寿詞に対立してゐる。ともかく天神の寿詞には尊い御子生れる根本の考へあり。丹比の唱へるのも、中臣のやるのももとは同じもの。中臣は一種の固定した戴物をたべる為に（二行欠）

壬生は、つまりある家の家族が宮廷より命ぜられて若御子を育てる事が始まると賜はる名であつて、壬生の中心は大忌人である。故に天子が常に一歩譲る場合にはおみといつてゐる。これは自分との関係を示すものである。

允恭天皇の時は丹比の壬生部が出来る。すると、その家々では自分の手で育てあげた御子に関する物語を伝へるのだ。その物語は、産衣を使ふ時に家のそばで唱へるので、この祝詞で尊い人の生誕を語るものが多かつた。同時にある天子の御一代記を伝へる事になる。天子の生れた時の事は壬生まかせ。

その後、御一代、末（一行欠）

古いものを見ると、天子一代に違つた事のみは出ない。大同小異であつた。それが後に変化して来る事になる。つまり、天子が生まれた時の育て神の語が壬生部の家に伝つて天（半行欠）

その伝記と称するものも本当にあつた事か。類型的な唱へ事に違ひない。だから、壬生部の祝詞は沢山あつた。残つてゐるもの少なし。その残つたもの、中にも本当のものは少ないらしい。加納諸平が見つけ、本居大平も知り、伴信友等まで借りてゐる。本居大平が丹生祝詞考を考へてゐる。この本疑はしいが、用語の中にも新しいものがある。

丹生祝詞は高野山の近くの天野の神に関するもので、天より

女神が来て、あちこちへ神の指定地を定めて歩いたと云ふ。うそとして形があつたのだ。

丹生祝詞の組織はもと面白いもの。今のでは普通の丹生神の祝詞となどいふ名前のある事はいはゆる天神寿詞がいろ〳〵な形で伝播した事がわかる。今現の丹生祝詞は本否不明である。かくして考へて来ると、丹生祝詞が選ばれた時に云はれた語が唱へられてゐる中に変化して来る。この丹生の伝へが天子の一代記の語り伝へを作る基礎になる。これが即、御名代部である。普通子供がない為に伝記が伝へられないので、子供すべき団体を作つて、その人の叙事詩をとりつがせるのだ。お子として部曲を御子代とし、御名代は天子後（四行欠）

身分の高い女には御子代、男には御名代を立てる。名を伝へるのでなく、その人に関する一体の事を伝へるのである。後に発達して荘園になる。村を没した時に作つて物語を伝へさせたのが、私有財産となる。

大春日の皇后に至つてはじめて荘園の意味がはつきりして来る。村が土地と村と、村の起し主の関係から物語がついて来る。皆同じ事ばかりであつたのに、同じのを嫌つて、別れて来、又合して来る。これを集めると宮廷の外伝が出来る。あちこちに同じものが出て来るわけだ。御子代、御名代は叙事詩に第二義のものが出るもと。はじめ唱へ言より叙事詩分岐し、更に又、天つ神の寿詞より御子代、御名代の叙事詩が生れて来る。故に記紀では系統の事がやかましい。系図のみは間違へ無いやうに一心に伝へてゐる。あいぬの系図はどこもかしこも系図が合つてゐると云ふ。記紀の一大要素は系図の部分である。昔の人にとつて大切な事であつた。それで見てゆくと、記紀の中に姉妹が一人の天子の子を生んでゐるのは昔は一群の妻をもつた為である。たゞ母の妹が次に母の後に直るだけでなく、母の妹とは自分を育てゝくれるその女と自分が夫婦になる。するとみぶべとの関係が非常に密接になる。その他に妻の妹と結婚するのと二つの形がある。

母の妹と結婚すると壬生の家との関係も深まる。神代の話をそのまゝ信ずれば、人皇以前は海の神との関係が密接になつてゐる。さて、この結婚の子から親への方法で見ると、母の妹と子と（一）のが原則らしい。その母の妹といふのには為事がいろ〳〵あるが、同じ神聖な為事さへすれば血統上の妹でなくとも信仰上の妹でいゝのだ。例へば、鵜葺草葺不合を豊玉姫が産み、育てたのは小母の玉依その他沢山の子守がゐた。大湯坐、若湯坐、飯嚼、乳母、湯母等がそれである。おもは母にも乳母の意味に用ゐてゐるが、主としておもは乳母の事。古い処でおものしる（乳汁）等云ふのは、母か乳母かわからぬ。万葉では、「みどりごの為こそおもは求むといへ乳飲めや君がおも求むらむ」のおもに乳母と母との近似した用語例を用ゐて面白がつてゐるのである。

大湯坐、若湯坐、飯嚼、乳母、湯母等――これ等の役目が揃ふ事も揃はぬ事もあるのである。そして皆同族に違ひない。処がこの母の為事を知るものゝうちに、小母が出来て来る訣

で、それがうばと代つて行く。このうばが姥と乳母とに岐れて来る。小母は小さい神を育てる処の聖なる女といふ事である。それでつまり山姥は小さい神を育てゝゐるわけである。小さい神が金時等言はれて来るのだ。それが人間の坂田金時と結びついたのだ。

足柄は山姥舞の山姥の根拠地。その山姥と小母と小さい神との関係が結びついたもの。小母は大体正式の妻の妹と云ふ事。われ〳〵御飯をまゝといふ。昔は上品であつた。今では下品がられる。まゝ、めし、いひの区別はわからぬ。御膳はどうやらわかるが、まゝといふのは飯嚼みをしたその物がまゝであり、嚼む人もまゝ。おもは液体のものに関してゐる。重湯も、おもに関係がある。そのまゝを食べさせる役のものをまゝと云ふ。平安朝のまゝは乳母で同時に継母の事もをもまゝといふ。乳母が母代りになる時に名称が連続してまゝといふのだ。それがまゝはゝである。継の字を宛てるのは意味によつたのではない。まゝは父が母の代りに愛した女である。一群の女の嫁入りがなくなり、貴族の世では、女と女房の一群が嫁して来る。その中の選ばれたものが主人に愛せられる。そしてまゝはゝになつて来る。これが御子代、御名代の話と併行して、日本文学を生み出し、又文学に影を落としてゐる。

六月末日

壬生とは何ぞ。壬生の女神の信仰を語り伝へる語部で、ミフ、ニフと云ふてゐる。壬生は又乳部・入部とも書いてゐるが、乳部は意味から、入部は音、入を用ゐて、入部（ニフベ）と云つたかとも見えるが、他の説明をせねばならぬ。前者はちおもを代表として見てゐるのである。入は水に入る故で、入、かづくで、日本では水に入ると云ふ事がわかつたのだ。水に入る部曲とは変だと思はれるが、入を宛てるのには、音と意味とによる面白さがあるのだ。

にふの語原はまだとけないが、みふは水の女神の名前である事だけはわかる。宮廷の御（ゴ）産の時には、昔は必ず壬生の氏人が出て来た。臨時に壬生を称したものである。壬生は臨時の職としての名前である。日本の大きな家々では大く水の神の信仰をもつてゐた。儀礼・信仰状態の違つてゐたものが宮廷を中心として歩み寄る。尊い人の後見役と定まるのは……皇子の壬生部と称するもので、夫々の家の水の呪術をもつて皇子に仕へる。天子一代の中に度々繰り返し若く健康である保証としたので、天子病の時等臨時に行つてゐた。かくして来ると代々宮廷に於ける天子の妻妾――主氏出と他氏出とあり、王氏は火、他氏は水の信仰に関係がある。水に仕へてゐる他氏の呪術で宮廷に入るので宮廷自身の呪術はひに関連し太陽の日に考へが結びついて来る。歴代の天子の中には他氏出の母の方と王氏の母の方と二通りある。前者は（後者の信仰についてわからぬ処あり）母が出たしるしが残る。それが壬生部で、御子代部、御名代部と称されてゐるもので、壬生部の一転化したもの。壬生部は、母子の伝へを兼ね持つてゐるわ

けである。そのうち傾向でわけると、多く……の壬生と称してゐる家には子供の尊い皇子に関する物語を伝へてゐる。これに対して、母の方の信仰を伝へたものがある。私部である。私は天子に対して私といふのである。天子が御子だか夫だかわからぬ。普通は母子関係になる。

天子―日置部　日置舎人部　……大……部　日置、舎人部
妃――私部　子代
皇子―壬生部　名代
混乱して了つてゐる

王族に関する部曲はかく三通りあるのだ。そして天子に対して私部と云ふ。これは私部（キサイチベ）――きさいつべ――と云ふ処から、妃の意味のない私がキサイと云はれたもので、沢山の私部を総合して特殊な名を捨てて、私部と云ふやうになつたもので、日置（ヒオキ）等云ふのは古くなつて昔の俤がなくなつてゐる。私部の方（キ・ヒ）が古い印象がある。

きさきが私部を持つのは宮廷の認めた私の領地のはじめで荘園の歴史としては考へて見る要あり。一々古は伝統的な物語を持つてゐた。前述の大春日の皇后が子供がなくて、足ずりをして泣いたと云ふのは悪く見れば私有財産の強請である。母の時は私部、子供の時は壬生部、同時に壬生部には育ての親の家の伝説を含んでゐる。つまり、皇子に関係しての物語は家々が持ち伝へる故に壬生部の名代であると共に育てた側より云へば壬生部の伝承になる。それで名代の伝承、壬生部の伝承とが出て来る。育ての親は子の母の出た処で、正確には母の妹が子の妻になつて来る。妃の妹が皇子の妃となるのだ。故に一面より見ると壬生部は妃の妹の為に伝へたものになつて来る。皇子の伝承は、皇子が天子になれば日置の伝承となると共に壬生部の伝承でもあつた。

私部、壬生部は一面、女の貴人の部曲だとも云へる訳だ。この伝へが記紀、その他の書物に断片的に伝へられ、例へば允恭天皇は、磐余の稚桜の宮にゐられた。そしてこの方の部曲が稚桜部、又若狭部と云ふ風にも云はれてゐる。此伝承は誉知部の伝承であつて、垂仁の御子の本牟智和気の命が生まれた時の話があるが、この方が詳しい伝へである。出雲人の杵築宮の神が物を云はせないのだとわかつて、出雲へ行つた。味耜高彦根の神が物を云はなかつたと云ふ話と同じ話。すると、磐余の池の話も同じ話で、極く簡単な物になつてゐる。舟に載せてゆるのは鎮魂法をほどこしてゐる信仰と同じ事である。後人は遊んでゐると見たのだ。

考へれば反正天皇の丹治比の壬生部の話と似てゐる。一つの伝承が、前後二部分に分れて伝つてゐる。半分づゝ二人の方についてゐる。かく一つの事が幾やうにも伝へられて、昔したいろんな事をした儀礼を語り伝へたのが事実のやうに思はれたのだ。誰の時の話を、後ろの方にうつしたかは不明。たゞわかるのは祭りの儀礼になつてゐる。祭りの唱へ言が歴史上の事実のやうに語り伝へられたのだ。故に昔の口頭に伝承せられた物語は結極少しになつて了ふ。非常に少ない数にまと

まつて了ふ。それはまう一例を引いてみる。一度、この世に生れて来て大きな儀礼の中の一部分を占めた場合はどうしてもなくならぬ。A、B、Cの間に共通の処が出て来なければならぬ。これは一つは昔の長い詞に――文章に関する記憶が重大だとした信仰から出てゐる。故に一度出た詞は分裂しても、どこかに似たものがある。丹比の話と同じ事になる。形式から見ても日置に重きをおいてゐる。忘れてはいけないといふので、どうしてもある部分を保存させやうと努力するやうになつて、不自然な形が残る。

例へば、大和より京を天智が遷す時に、額田王の作歌に対して、井戸王の和する歌に、

　三輪山の林の先のさぬはりの衣につくなす目につくわがせ

わがせの対象は男で、男へ男か女が歌ひかけるのであつて、この歌は続けた歌でも（四行欠）

古事記では、

　やすみしゝわが大王、

紀では、

　わが逃げのぼりし、榛が枝あせを

とある。このあせをと似たのは、日本武尊が、

　尾張にたゞに向かへる一つ松あせを

とあるのは、日本武尊につけていうたに違ひない。（四行欠）

舎人が作つたのを皇后がとりなされて、天子の気持ちがなほつたと云ふ。これは舎人部の伝承ではないか。舎人についてゆく事情はと云ふと、この歌が云ふ大泊瀬部、詳しくは大泊瀬舎人部と云ふものは、舎人部の伝承である。とねりは采女と対照的の語で宮廷から隔つた国々の酋長たちの子女をば宮廷の神に仕へさせて地方へ帰す。すると、これが宮廷の信仰を地方へ宣布した一番有力な方法であつた。大舎人部に対して采部（ウネベ）と云ふてゐる――後に女を主とした面影がなくなる――これが雄略天皇に仕へた地方の豪族の子が、天皇の名を伝へた村を作つて大和宮廷の信仰を宣伝するのは雄略天皇の部曲になる。その伝承のうちの一部だと思はれる。

采女に関したのは、沢山ある。雄略天皇の時に例をとると、天皇は泊瀬の百枝槻の下にゐまして……

この時の歌は古い天語の文句をそのまゝ歌つたもの故に天語歌である。三重の采女の手落ちをなぜ怒られたか不明だが、こゝの歌からそんな事実を出して来たのだ。しかし、この歌は、はじめ家ぼめの歌である。ついで鎮魂の歌になつてゐる。断片的なものであるが、これが天語歌の形式をとつてゐる。これが采女部の伝承である。処が他にも天子が采女を殺さうとした例はある。葛城皇子が浅香の采女から安積山の歌を聞いたのと同じ事である。

かういふ処に采女部の伝承の中心があつたのではなからうか。天子に対する一種の魂を鎮めるまじつくに関した歌があつて、その歌を中心としてまじなひが行はれた。もつと他にもある。

これが抜き出された。するとわかる事は天子に関しては男・女二つの部曲あり。宮廷及び天子に関する信仰を伝へて行つた事がわかる。そこに一つの歌が生れて来るといふ事が出来る。

雄略の三重の采女に関したのと舎人を殺さうとした時と似てゐるが、前半は家ぼめの歌で、家ぼめの歌が古い歌に非常な勢力があつたが、これは誰がした。水の神の信仰をもちまはつて、水に関した歌の伝へと（一）、家ぼめの詞を持ち歩いて家あるじの健康と、家の安全（二）を祈る。この二つをもつて歩いた事がわかる。して見ると、あちこちを漂流して歩く処の神人は少くとも二つの口頭の詞章をもつて歩いた。呪詞の事もあり、又叙事詩の短くなつた歌である事もあるが、さういふものをもつて歩いたと云ふ事がわかる。水と家とに関するもの。それが複合し、合理化して又新しい理会の出て来たものが、奈良朝以前の文献に現れて来てゐるのだ。本当に全く、昔のまゝに伝つたものはないわけだ。すべての古いものを読む時には、この用意をもつて読まねばだめである。出雲のほかひのことばは、日本の文学をうながすのに力があつた事を考へて、風土記、日本紀、万葉などを読んでいたゞきたい。

十月六日

采女の起原はすべてが雄略天皇に関連して説かれてゐる。故に、雄略時代に起つたものと見て、差し支へない。一体、雄略の御代はいつか。雄略の御名に於て伝へる伝説の部分があるからかつきり雄略時に采女が起つたと云ふ不自然な事は云へぬ。結極、采女の起原説は雄略に集中してゐ、又さう信じられてゐたと云へるだけ。それと同時に采女の宮廷における呪力、呪術の起原は雄略の御代を起原と信じてゐたと云へる。これは不思議な事である。も一つ考へるべきは女人が宮廷に仕へてゐる事はどこまで遡つてよいか。年代の限界不明。故にある点、雄略をもつて始まつたと見る説が昔にあつたのものと見たら更によい。昔の人にもわからぬほど古く、しかも古人には起原のとけぬものは価値がないので、ある程度のところに起原を求めておく。つまり、雄略にもつて来る事もいろんな事が雄略に関係深かつた為に、起原にこの天子をとつたとも云へる。

ところが、采女はどういふ文学を伝へてゐたか。采女の文学――もつてゐた、又勢力範囲がどの位ひろがつてゐたか、或は安積山の歌の如き、奥州まで拡つてゐた一種の呪歌が、奥州までいつてゐた事を示してゐる。逆に云へば奥州より出て奥州へかへつたとも云へる。更に遠い半島諸国から采女を召してゐられる。紀の百済新撰と云ふ書物によると、百済の国の適稽（ユケ）郎女が雄略天皇に仕へてゐた事がわかる。これが日本の池津媛である。すると逆に采女の勢力が百済にまで及んだと云へる。百済より来た事を示すとともに采女部の力がそこまで拡つてゐた事がわかる。采女部の文学が、池津媛が持つ

てゆかずとも、伝播してゐた事はわかる。その文学は天語歌を中心としてゐるらしい。天語の歌には、

いしたふや天馳使ことの語り言もこをば

と云ふ証明の文句がついてゐる。一方は私部の方の話でいつた。

雄略の采女の歌も天語と云ふ。すると、采女の呪歌が私部、少なくとも大春日の皇后の伝記中に織り込まれた天語歌の影響と同じものが三重采女の歌に出る。すると采女の歌と私部の歌と根本は一つだ。前回、水、酒、禊水は、水として同じものだと云ふ事になつたが、根本では采女部と私部との間に明らかな区別を見出す事が出来ない。処がも一つ問題にすれば問題にならなければならないものがある。われ〳〵は采女の語源は不明。采女に対して、をとめといふ語あり。どうも対立的に用ゐられてゐる。万葉の歌を見ても、「をとめがともはともしきろかも」等と用ゐてゐる。宮廷に仕へ天子のそばにゐるものを、をとめの語で示す。をとこと対してゐるとして簡単に見てゐるが、もつと考へねばならない。このをとめは例へば、明石海峡から兵庫に入ると、敏馬、ミルメ（ミヅメ）の浦、又はをとめと云つたらしい。万葉に、玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島が崎に……。をとめを考へると変な感じがする。をとめ神あり。丹波の八処女などで代表されてゐるものである。をとめは云ふまでもなく、をとこと対立し、更に前は、復活（ワツ）（男女）であるに違ひない。復活するとは神事を行ふ資格を得る事が日常生活を別と考へられて復活と云ふ事になつて来る。

藤原の大宮仕へあれつがむ処女がともはともしきろかもあれつぐは、現れ続くと云ふ事。それがをとめ、即ち神の女になるわけである。処が本当に云ひ切れぬが、をとめと云ふ事は地方の神を祀る女と云ふ事ではなからうか。宮廷の神以外の神をまつる為に出た男女がをとめ、をとこ。宮廷にゐる事によつてをとめ、をとこと云ふ。宮廷以外の邑々の信仰を保つ為に復活し復活しして来るものらしい。それが同時に地方の神に属するものが宮廷に関係せねばならなくなり、宮廷に入り、宮廷のものまでをとめと云ふ様になる。地方の半神職、半神女は、をとめ、をとこで表はす。後の神輿かきはをとこで表はす事が出来た。

そのをとめが丹波の八処女等云ふ事で表はされる。地方巫女の意味を持つてゐると思つてはどうかと思ふ。

宮廷では別のことばがあり、それが采女ではなからうか。

玉藻刈る敏馬を過ぎ　一本をとめ

を軽く見てゐるが、敏馬とをとめの関係を知らぬ為である。敏馬は若い水の神より表はれ禊ぎをすすめる神女と云ふ事であるから、その地名ををとめと云ひかへてゐるのは不思議である。この地名が動きがないところである。すると、敏馬とをとめの密接な関係にある事を知つてゐたに違ひない。敏馬とをとめの関係を知らぬとしても、間違ふ理由がなければならぬ。敏馬の地を処女と云つたかもしれぬ。何にしても二者入れかへる自然な事情がなければならぬ。単なる音韻変化ではない。内容を知つて変つたか、地名ををとめと云つたか、

ともかく敏馬と、をとめの関係を理会せねば歌があるわけない。この歌、民謡故にかならずしも摂津と淡路の野島崎でなくても、他の地方にこの地形と似たところがあつたかも知れぬ。

単なる間違ひと今日では考へやすいがさうでなく、処女神といふものをば言ふ事が出来れば、地方の神、更に考へねば地方の巫女が神に仕へる事によつて、神と同格になり、神の影に隠れる。神祭りの時、神は実際表はれず、神の代理者としての巫女は同時に神になる。それで、今暫らくのところ、地方の巫女が地方の巫女としてある時がをとめ、一方、采女は地方の巫女であつても宮廷に於ける巫女と云ふ意味の生活をすると、采女になる。かく説くと云ふと大体、不都合なく説明がすべての事につく。

まづ采女の携へ歩いた歌と云ふものは、安積山の様な歌、天語りの歌、の様なものを中心とした一団のものであつた様に思はれる。采女の文学と私部の文学と似てゐ、手順を経て見ると、同じ事らしい。采女に対して、舎人及び舎人部の事を云ふて部曲の文学の話をとぢる。

舎人の事は度々既に申した。山部の文学の話に山の暦、天子に関する暦の事を云ふた筈。舎人の語源不明である。舎人と似た言葉はとねと云ふ語。とねと云ふ語は、時にそれ自身舎人を示す事がある。例へば、舎人親王をトネノミコと訓み、舎人女郎は、トネノヲトメと訓まれてゐる。宮廷の近くの村にゐる者をとねと云ふてゐる。結極は、わかりさうでわからぬ。宮廷以外のとねは邑の宿老と云ふ事。云ひかへれば、をとこを総括めてゐるのがとねで、宗教上の宿老。しかしこれがどこまで宮廷の舎人と関係あるか。あるやうで、又主張できぬところもある。まだ結論に達する時を待つほかないが、宮廷では舎人と云はれてゐるものは少なくとも、采女以後の発達。采女に対して、同様の職業の男の団体を作つてそれを舎人と云ふたらしい。その団体は考へられる。

宮中に隼人といふものがある。これは実は女装をしてゐた。領巾をかけてゐた。采女と同格に見られてゐた。一方、靫負ふ伴の緒と云ふ一方、領巾かくる伴の緒と云ふ。宮廷を守り守護する団体を二つに分け、男を靫負ふ伴の緒、女を手繦懸る伴の緒と云ふてゐる。男であつて女の仕事をしてゐたからをかしい。隼人はうねめのみことの職業的子孫と同じ事をしてゐる。この隼人が舎人と同じに使はれてゐる事は史上証拠あり。どうかすると宮人と云ふことばは女に対して用ゐる語であるのに、男にも用ゐてゐる。大宮人、などこれである。奈良になると平気で用ゐられてゐるが原則的の用法が及ぶと女に用ゐてゐる。おやと云ふ語と同じである。鎌倉頃までおやを原則的用法で母親にしてゐる如きである。その宮人の用例変化する順序は女装して天子に侍する者があつたからである。

女装者は隼人の他に侏儒（ヒヒト）、これが宮廷に古く仕へてゐる。小子部蜾蠃の話が雄略紀に出てゐた。宮垣の下で養ふたと云ふ事になつてゐる。小子部と云ふのは蚕をとれとの理会は後の

事で小子部は侏儒と云ふ事。ひきうどを管理したのが小子部の連と云つたのだ、と思はれる。続紀までにも侏儒を宮廷で用ゐた証拠がある。何も宮廷で支那風の弄臣、――フール――を用ゐる風をば真似たのでない。日本の宮廷にそんなものが発達してゐたのだ。何故、ひきうどといふもの、云へかへれば小子と云ふべきものを宮廷で養ふ事になつたか。つまり采女も一種の spilit の代理者として宮廷に仕へてゐる。采女が国郡の代表とすれば小子は宮殿の spilit で、祝詞を見れば、その考へがはつきり出てゐる。宮殿の spilit は小さいものと見てゐる。丁度、采女が代表として宮廷に仕へたと同意。それが後々に、平安の宮廷の殿上童になつてゆく、と思ふ。貴族子弟の場合には童殿上と云ふ。つまり、人間で小さいものが宮殿をもちこたへる為に必要で、これがあちこちしてゐる間は宮廷は大丈夫である。そこで、子供を用ゐる事になる。さうした者を小舎人と云ふ風になつた。又、小舎人童とも云ふ。

神楽歌の、

大宮のちひさことねり玉ならば昼は手に据ゑ夜は巻き寝む

これは男色の歌と見なくてよいのだ。大宮と云ふ歌は、これはちひさことねりは、ちひさご舎人と読むべきで、小舎人、――侏儒にして舎人であるものを意味してゐるのではないか。勿論平安に侏儒にして舎人がなくてもよい。その歌はいつから起つたともなく残つたものだから、結極小さいもの。古くは侏儒を天子の近くに用ゐられ、子供を宮廷でもてあそばれたのが、更に変化して、舎人を生む。一方、隼人の女装で仕へてゐるものがあるのだから、子供は女との差別がないのだから子供が宮廷にゐる事は不思議はない。男で天子の近くに仕へてゐるものは、女又は女に近いもの、考へが下に置かれてゐるのだと見て差し支へない。日本紀の履中天皇が住吉中大兄が反乱せられた時に、大兄のそばの宮人の隼人が大兄を殺して履中、反正天皇に帰服したが殺されてゐる。日本の事実の漢学的の考へ方である。これがやはり舎人である。かゝる舎人と同じ為事をしてゐるものが出てゐる。舎人は宮廷で天子に侍してゐるもので天子から采女と同じく舎人を分けられる。随身の武官を分けるのと同じ事。同じく舎人に関係深い雄略に関して霊異記――平城天皇の時に出来たが奈良に生きた伝へである――に小子部栖軽が三諸山の神を捕へに行つた話の起りとして雄略天皇が雷鳴の夜、大安殿（オホヤスミドノ）で皇后と御寝の時――神祭りの夜で神が下る夜故に雷鳴する。神聖な夜である――そこへ蝶贏が入つて行つた。そこで天子が恥ぢて雷をつかまへて来いと云はれた。そこで赤駒と赤旗で、泊瀬から山へ飛んで行つてと路筋を書き、蛇を捕へて来た話がある。小子部蝶贏は舎人であり、同時に子供でなければ侏儒だと云ふ事が考へられる。かゝればこそ小子部の管理者になつたのだ。宮殿で天子に侍し、どこへでも入つてゆけるものは、女でなければ、性のないもの。日本宮廷では女として扱つたもの若くは宮廷の spilit。普通には舎人が出来て小舎人が出来

るといふが、小舎人が先づあつて舎人が出来たと考へる方が本当らしい。この舎人は、宮廷の任期が満ちると――昔は任期があつたかどうか不明。で、呪力がなくなるまで使はれてゐたのだ。任期は後に出来たのだ。古代は神の意志によつて定つた――采女を対照して考へると自分の国へ帰るのだ。しかし舎人は正格に自国へ帰つてゐるとは思はれない。却つて他地方を歩いてゐる痕がある。一体舎人の職業的部曲は舎人部――大舎人部、日置大舎人部――と言ふ。宮廷の舎人を大舎人と云ふ。地方へ出ての仕事、日置である。故に日置の大舎人部と云ふ。日を数へる、暦を数へ教へる部曲である。更に日置部とも云ふ。例外なしに世界中の古い国は、国々の君主に呪術的勢力ある君主を上に頂いてゐた。（フレーザーのゴールデンバウにも出てゐるし、単行本にも書いてゐる。単行本は輸入禁止。この部分、大岡山から出した。）

君主の勢力の源は呪術にあり、それによつて勢力を得て来たものが多いと云ふ。信仰的に国力が進んで来たのである。結極、前述の如く天子のもつてゐる暦、云はゞ天子の国に行はれる暦を地方へ持つてまはる。この暦の行はれる限りは天子の国といふ事になる。それが大社から暦が後まで出た理由である。日置きとは、源為憲口遊（クユフ）――（群書類従本あし、古典保存会本よし）――に日を数へる意味に用ゐてゐる。置くと云ふのをば招ぐだと云ふ。清盛の日が招いた話、長者の話等にこの伝説あり。日招ぎだと云ふ先輩があるが、ワ行音とア行音とは妥協はむつかしい。天体の運きを数へて耕作時を示す術である。その暦が日置きになる。

（一行空欄）

日置部は天子に対してあつて公のも、これに対して皇后の為に私部が出来た、と見ねば、キサイ部を私部と書くわけはわからぬ。

日本文学で日に関係した事が多い。日本は太陽神を崇拝してゐる為に日光に関した事が多いと云ふが、それは簡単すぎる。日本の神道では、つきつめると姫神になる。その陰に男神がゐる。姫神はその方に仕へてゐて、同時に人間であつた。目に見えぬ尊い神の代りに人間神を拝んだのが、のち姫神として信仰の中心となつた。日本の信仰は、抽象的なものではない。文学の上で、日に関した事が出て来る。例へば、高光る日の皇子、あまさかるひな等云ふ。あまさかるひなは天に遠くかゝつてゐる、おひさまと云ふ事である。天子に対して日を以て現はす事は非常に多い。日の御子と云ひ、天子になる資格ある数人の方を日嗣の御子と云ふ。――大昔は太子、儲君、をヒツギノミコトと云ふ――太子をひつぎのみこと云ふのは、（国歌大観は仁徳の歌をわきいらつこの歌にして了つてゐる）天子になる資格をもつてゐる方と云ふ事で幾人もある。この間に神秘な力を発揮する人に定つて来る。後には、外戚の力、壬生部の力がある事になるが、内的にはその人の聖なる力による。天子を日の御子と云ひ、儲君をひつぎのみこと云ふ。時には、間違つて、日の御子と、ひつぎのみこの事を云ふてゐるが、天子の為事をしてゐた方、昔の人は天子であ

つたり、摂政のみこである事も、ひのみこと云つた。ひのみこは、太陽神の子と云ふ事である。考へると、太陽神の信仰と云ふ事はつきつめるとうすいものだ。太陽神の信仰が強くなるのは暦の信仰によるのだ。云はゞまじつくking、暦の神としての天子と深く尊信するやうになつてからの事。ひのみこは太陽神のみこ—邇々芸のみこ、同時に昔の人の信仰では、第一代も百代も同じ事。資格のみ不変で、それに当る身体は変るのだ。だから、仁徳でも聖武でも、第一代の日のみこと同じ事。常識的には時代錯誤をもつたまゝ書いてゐる。それを見ねば日本の文学はわからない。人麻呂等も入り代り立ち代りやつて来られると云ふてゐる。日並皇子の尊と云ふ方、岡の宮の天皇、（又は、島の宮天皇といふ。文武の父）をお悼み申した長歌には天武の事を云ふてその方の御子としてこの方を示してゐる。この世の為事がすむと岩屋に入り、又おいでになると考へてゐる。その間に何かつゝむものがなければ（山、穴等）代れないのだ。同一人か、交代してか、その循環は異分子になるのか、同じ者が来るのかはつきりしない。昔の人は錯誤しながら昔の人と今の天子違ふが、語の上では同じと云はねばならぬと考へてゐた。

日嗣の皇子と云ふ事は、文学としての一種目として考へるべきだが、記にある出雲系の系図が一つのひつぎの型である。古く譜第と書いてゐる。天子に関しては日継と云ふ——ツギダケデワカル——その継がある。日継は神聖な口頭の系図と云ふ事。日継のみこと云ふ事は漠然とひつぎに入られるみこと云ふ位の気分的な解釈でいける。しかし、ひつぎは、みつぎと同じに用ゐてゐる例もある。この語も連想の加はつてゐる語である。少なくとも天子の為のひつぎのみこと云ふ事は、奈良前に文法観念が変つたのだ。小さく云へば熟語を作る法、大きくは語序が変つた。たてはしを昔ははしだてと云ふ事がある如く、ひつぎもつぎひと云ふ事。すだれ下、したうづが、この例に入つたものである。古い文法を考へて見ると主、客、述の順ではない。文法の変化、熟語作製法の更迭があつた。ひつぎのみこは、つぐ処のみこと云ふ事。つぐはひきつゞくといふ事。ひきつゞく処のみことといふ事。

尊い方をひで表してゐる。これは、申すまでもなく、太陽神をば日本宮廷の信仰の中心と考へて来たから。それにいたる経路は宮廷の日読みが有力になつて来た為と云つていゝと思ふ。それで、前述のやうに宮廷の暦をもつて歩く舎人があつた。宮廷の信仰を宣伝する。昔は方便でなく目的であつたのだ。さういふものが沢山諸国へ出た。それが日置大舎人で、紀によれば、敏達天皇の御代となつてゐるが、あまり後過ぎる。処が舎人をなほ考へると、天子のそばに近く侍する者が舎人で、出来るだけ天子との関係の疏のもので、歴史的に関係深いものは遠くゐた。平安まで宮廷の武官を考へる事には親衛の者と遠くにゐる者と二つに考へねばならぬ。歴史が古い程遠く、近い程近くにゐる。これが混乱を起して来る。例へば、大伴部を宰領してゐる大伴連と云ふものは伝説では古いもので天以来と云ふてゐるが、或はもつと自由かも知らぬ。

五伴緒の中でないから。けれど考へて見ると、久米部と同視せられてゐると同時に、大伴部が物語と同視せられる。物部は天子の一統が大和に入られてから関係ついたもので、大和以後のものである。大和以後の物部の名の中に入つて了つたばかりか為事も物部に近くなつて了ふ。大伴・物部の区別は立たぬ。大体は門の番人である。宮廷の外郭を守る。これは同時に物部の為事である。処が舎人と称する新興武官階級は宮廷の中で奉仕してゐる。平安朝の所謂殿上に仕へてゐる。今の考へ方では舎人の方が偉い事になるが、昔は近いものほど卑しくて遠いものほど良いといふ事になる。他の例で見ても、宮廷の天子のゐるところがみかど、海を限りとして宮廷の御領全体をみかどと考へる。所謂遠のみかどである。当然、古い武官が行くのに、新しい武官、防人が行つてゐる。われ〳〵の考へると、同じ様な事が発達するのだ。吾々からは天子近いものはむつまじく考へられ、遠いものは、歴史も新しい。疎遠なものと云ふ事になり混乱する。歴代の大宰の帥は宮廷に関係深いものをやる一方防人は遠い者をやるといふ風に混乱してゐる。この混乱からだん〳〵物部の文学――宮廷に久しい歴史を有すると考へられる武人の集団と宮廷との関係がわりに新しい舎人の文学とが一緒になつて、――と舎人の文学とを話して舎人の文学の話を止める。

雄略の巻は、采女、舎人の起元を説く事に力をこめてゐる。雄略は、采女・舎人の起原に関係深い方だ。その雄略紀を見ると、まづ葛城山へ狩りに行き、猪を舎人がこはがつて榛の木へ上つて了つた。天皇はこれを殺した。記では、天皇が逃げる事になつてゐる。采女の話の順で行くと、この歌は舎人に関してゐるだけに舎人の伝へた歌。

やすみししわが大君の　あそばししゐの病猪の　うたきかしこみ　我が逃げのぼりし　あり丘の榛の木の枝

面白いのは雄略帝に吉野行幸の時の歌がある。あぶが天子の腕をさしてゐた。とんぼが、それを殺して了つた。時に天子が、そばにゐた臣に――舎人等に――詠めと云つても詠まぬので、天子が、

み吉野の小牟漏が岳に（記）大和の小村の岳に（紀）猪臥すと　誰ぞ（記）誰か（紀）この事　大前に申す

と始まり、

やすみしし　わが大君の　猪待つと……

記の方が単純で紀の方は形がとゝのへられ過ぎてゐる。とんぼが食べて行つたので、秋津野と云ふのだと説いてゐる。その記念にやまとの国をあきつしまと云ふと云ふてゐるが、これは吉野の国であるが、昔の人はふら〳〵云ふてゐるのだ。しかし、何故、国名をつけるのはとんぼが出て来るか。神武帝も掖上の嗛間の丘に登つて、あきつのとなめせる如しと云はれて以来、……と云ふのに、雄略紀でかく云ひ、万葉ではあきつのと云ふのは雄略天皇のこの事件で、こゝをあきつのと云ふと云つてゐる。何か、とんぼで国を祝はねばならぬ理由があつたのだ。そんな歌があつた後にこんな理由をつけたのだ。とんぼの話があるのは、神武、雄略の事件によるので

はない。何かとんぼで国を祝ふ理由があつたのだ。それは国が水の上に浮いてゐるところから云ふのだ。ともかく、天語歌など見てもまるでぎ|みの命が国を作つた時のやうな事を雄略の采女が云ふてゐる。「浮きしあぶらこをろ〳〵に……」等。かく唱へ言に古い事が出て来る。この語では過去も現在も同じ事になつてゐる。雄略の事かと思ふて、神武であつたり、神代の事であつたりする事もあるのだ。

吉野のおもろがたけに……「だれぞ大前に申す」は天子のそばにゐる人が取り次ぐ形。舎人の生活で伝達した形式が歌の中にいつたので、舎人の歌はかう云はなければならないのだ。紀の方は飾りすぎてゐるが記で見ると、やすみししわが大君はと普通にはじまつてゐる。誰ぞ大前に申すまでは、舎人の語だと云ふ事を思はせる習慣が入つてゐるのだ。記紀の歌には囃詞等も入つてゐるが、これは手順が入つてゐる。神武の条を見ると、舞踊の動作が入つてゐる。

こはいのごふぞ

いごのふと云ふのは恐らく舞ふ処の動作が入つてゐるのであらう。又例へば、神武紀に、兄猾を亡ぼした時の、

宇陀のたかきに……これを久米歌と云ふ。

楽府この歌を歌ふ時は……

と文章で説明するものもあるが、歌の中に動作等を説明してゐる事がある。誰ぞ大前に申すは、舎人の動作を云つたものである。この歌は恐らく舎人が自分等が歌ふ時に自分の職の起元としての雄略の話をする時にはこんな歌ひ方をしたのである。雄略記の歌は、さうして見て差し支へないと思ふ。雄略記は采女、舎人に費やされてゐると云つてもよい位である。更に延長して考へると、武官の関する歌、例へば久米歌、と云ふものも、実は、天□かどうか云ふだけでもやぼだが、歌から見れば天子の宮殿の廻りにゐた事がわかる。はつきり久米氏の歌とわかるものと、はつきりしないものとを入れて十二ある。

宇陀のたかきにしぎわな張る
忍坂の大室屋に……も久米と見てよい
今はや、今はやああゝしやよ　（紀にのみある）
えみしをひたりもゝなひと、ひとはいへども、はむかひに

みつみつし　二首　　この歌で久米部の民の生活が幾分わかる。みつみつしでわかる。そねがもと。

久米の子等が、宮廷垣の下に住んでゐると云へると思ふ。

神風の伊勢の国は……

たゝなめていなさの山の木の間ゆも……

以上、戦争に関係のある歌。久米部の祖あると共に大伴氏の祖先が関係してゐる。更に、はつきりその事の見えるのは、結婚の歌である。大国主の沼河比売に通つた歌が求婚の歌で、記にはこれに類した歌、四首あり。

やまとのたかさじぬ
かつがつも
あめつゝ

をとめに

これは大久米命が神武帝について行つて、処女との間の仲介をした時の歌。三人（神武、大久米、皇后と）の歌。大久米命は久米の祖であると共に、大伴氏の祖としてゐる。久米の為事のを大伴が継ぐと職の上の祖が大伴の祖となる。この神武の関係あるものは、久米に関係深く、戦争と求婚と、も一つ、

あしはらのしけしきをやにすがたたみいやさやしきてわがふたりねし

新しい歌だが、これも久米歌として一括していゝと思ふ。つまりまづ武官の歌の古いものとして見られる最初の久米歌及び久米歌系統のものは、これだけの条件を備へてゐる。敵をのろふものと、求婚或は結婚讃美の歌と。しかも考へると、その歌を歌が伝へてゐるものは、その事に昔与つた人の子孫だといふ事。久米氏祖が、その子に与へたからその歌を歌ふ。これは久米から大伴に伝つたもの。大久米主が大伴の祖といはれ、大伴の祖道臣命が久米歌に関係してゐる事でも知れる。それと共に武官といふものは大昔から、すでに云つた様に、日本宮廷が栄え出す前、漠とした大昔から一種の舞踊と歌とを奏して目に見えぬ外敵を退けた鎮魂の舞踊をした。同時に魂をこちらへもたらす鎮魂（二義）も行つた事が考へられる。処が武官の中にどちらとも解釈つかぬものあり。

門を守るが天子の側にゐるかわからぬもの。後の六衛府に属するものは物部と舎人が同格に見られてゐるわけである。それ等のものがすべて宮廷の音楽を掌るやうになつて来る。著しくなるのは平安朝に入つてからで、平安朝では武官が音楽に携はる。

ともかく、外内、門にゐるもの、垣庭、殿、神殿近くにゐるもの等が混乱して来る。それで物部に舎人まで含んで来る。すると、舎人と物部の関係に於て、日本の古代の歌のわからぬの事がわかつて来る。日置大舎人のやうに宮廷より出てゆくものは暦をもつて行くのみでなく、舎人の文学――雄略の歌の如きが主なものであらう――を持つて行くと考へられる。例へば、暦の起原を説くやうなもの。舎人の職の起原を説くもの等は、記紀は無関心で書いてゐる故に見られないが、部曲の文学の痕は雄略記辺に出てゐると見てよいと思ふ。